

かがやくお日さまが、明るみにだす

ドイツ

昔むかし、ひとりの仕立て屋が、仕事をさがして、広い世の中をあちこち歩きまわりました。けれども、仕事は、いつこうに見つかりませんでした。仕立て屋は、貧しくなるばかりで、とうとう、お金が一文もなくなりました。

あるとき、仕立て屋は、ひとりの旅の商人に出会いました。仕立て屋は、「こいつは、金を持っているにちがいない」と思って、商人に襲いかかり、「おい、金を出せ。さもないと、なぐりころすぞ」といいました。商人は、「命ばかりは助けてくれ。金は持っていないんだ。銅貨が八枚あるきりなんだ」といいました。

「いや、おまえは金を持っているはずだ。さっさと出せ」

仕立て屋は、そういつて、なぐりかかりました。商人の息の根が止まりそうになるまでなぐりました。商人は、いよいよ死にそうになると、最期の言葉をいいました。

「かがやくお日さまが、明るみにだす！」

そういいおわると、息をひき取りました。

仕立て屋は、商人のポケットに手をつこんでお金をさがしました。けれども、銅貨が八枚出て来たきりでした。仕立て屋は、商人をやぶのかげに隠し、また仕事をさがしに出かけました。

長いこと歩きまわったあげく、仕立て屋は、ある町の親方の所でやとってもらいました。

親方には、美しいひとり娘がありました。仕立て屋は、その娘と結婚して、まじめに働き、満足した暮らしをするようになりました。

何年かたつと、子どもがふたり生まれました。親方もなくなり、妻とふたりで、家を切り盛りしていくことになりました。

ある朝のこと、仕立て屋が、窓辺のテーブルについて座っていると、妻が、コーヒーを運んで来ました。仕立て屋がコーヒーを飲むとすると、お日さまがコーヒーにあたって反射して、壁の上のほうにきらきら光って、まるい光の輪を作りました。

仕立て屋は、それに気がついて、いいました。

「ははあ。やつは、明るみにだしたがってるな。だが、そうはいかないぞ」

すると、妻が、

「あんだ、それはどういう意味」とききました。

「いや、これはだれにも話すわけにはいかないんだ」と、仕立て屋がいうと、妻は、

「わたしのことを愛しているなら、話してちょうだい」といいました。仕立て屋は、しぶり
ましたが、妻は、だれにもいわないからと、しつこくせがみました。

とうとう、仕立て屋は、話して聞かせました。

「昔、一文無しで旅をしていたころ、ひとりの商人をなぐり殺したことがあるんだ。その商
人が息をひき取るとき、『かがやくお日さまが、明るみにだす』といったんだ。今、お日さ
まが、それを明るみにだそうとして、壁にきらきら反射して、まるい輪を作った。でも、そ
うはいかないぞといったんだよ」

それから、仕立て屋は、妻に、このことは決してだれにもいってはいけないと、念ねんを押お
しました。妻も約束やくだてしました。

さて、妻は、親の家に行ったとき、

「ねえ、ほかの人につけて話さないなら、うちの人の秘密ひみつを教おえてあげる」といって、こ
の話をすっかり話しました。すると、三日とたたないうちに、町じゅうの人にこの話が知れ
わたりました。

仕立て屋は、裁判さいばんにかけられて、死刑しけいになりました。やっぱり、お日さまが、明るみにだ
したのです。

村上郁再話

資料『完訳グリム童話Ⅱ』小澤俊夫訳／福音館書店